

第63回 日本PTA全国研究大会  
第62回 日本PTA北海道ブロック研究大会  
札幌大会 終わる



全国から約7,200人のPTA会員が集まり、第63回日本PTA全国研究大会 第62回日本PTA北海道ブロック研究大会札幌大会が、8月21日～22日札幌市で開催されました。

「ひろがれ 子の未来! つながれ 親力! ~今札幌から始まる これからのPTA~」をスローガンに掲げ、

- (1) たくましく おもいやりのある子どもを育むPTA活動
- (2) いのちの重さを語りあえるPTA活動
- (3) 大人がともに学びあうPTA活動
- (4) 家庭・学校・地域が手をつなぐPTA活動

をメインテーマに様々な視点から議論しました。

初日は、10会場で分科会を開き、開会式と基調講演、パネルディスカッションや実践発表を行いました。二日目は全体会が行われました。参加者の感想を掲載します。

### 第1分科会（組織運営）

南極観測隊という厳しい環境の中、メンバーと共に協力し合い任務を遂行した南極料理人西村 淳氏の基調講演でした。個の力の結集が「チーム力」になっていくと体験談を含めたお話でした。実践発表では地域安心安全ネットワークなどを築いた学校を例にあげ、家庭・学校・地域とのつながりの重要性を再認識しました。PTA 見直し委員会の取り組みについてのディスカッションなど身近に捉え、感じ、とても参考となりました。組織運営にあたり、置かれた環境は多様ですが、私たちはPTA活動の中で如何に「魅力あるチーム」として確立して行くかを考える事が出来た良い機会となりました。

### 第2分科会（家庭教育）

第2分科会『家庭教育』は、「札幌・ジュニア・ジャズスクール」（中学生クラス）によるプロ顔負けのオープニング・アトラクションで幕が開けました。基調講演では札幌市円山動物園の田中俊成園長より、飼育を通じた動物との愛情交歓の話題提供があり、そこから私たちの家庭における子育てや家族関係を見つめ直す機会を得ることが出来ました。実践発表では、札幌市立澄川中学校からPTA活動の問題点やPTA活動が子どもたちとともに成長できる活動となるようアンケートを通しての発表があり、札幌市立常盤小学校PTAからはPTA地区委員会による「デイキャンプ」や「スノーフェスティバル」などの活動の様子などの発表があり、また、子どもたちに人気の怪盗Xも会場に登場し場を盛り上げていました。最後にパネル・ディスカッションとして地元ラジオパーソナリティも勤める中村氏をコーディネーターに迎え「家庭力・親力」についての話がありました。

中村氏の軽快な語り口とパネリストのアットホームな雰囲気、会場内には心のハーモニーが奏でられていました。

### 第3分科会（学校教育）

第3分科会は、「教師の役割 親の役割」に関する基調講演を聞きました。

子どもは、親としての姿勢・親の言葉遣いなどで変わる。また、教師のたった一言でも変わる。それだけ、子どもは親や教師を見ていて、ちょっとしたことで良くも悪くもなる。やはり、「子どもが親を思う気持ち」「親が子どもを思う気持ち」は、人間教育全ての基本で教師も同じこと。それを踏まえて、教育しなければならないなど、改めて教育について考えさせられました。

また、最後には、子どもは、親や教師から物理的に離れるが、心は繋がっていてほしい。それがあると輝ける大人になれると思う。と経験を踏まえた講演を聞き、感心させられました。

実践発表では、全国でも珍しい、同一校舎で教育活動を実践する小、中学校のPTA活動

について、メリット・デメリットや今後のあり方についてなどと、札幌市の補助を活用し区のPTA連合会で毎年行っているコンサートの成果や運営の難しさなどを聞き、少しでも単位PTAでも実践できることがないかと考えさせられました。

#### 第4分科会（広報活動）

##### 基調講演

なかなか自分では観に行くことのない演劇を鑑賞することができました。

言葉の話せない動物が話せたら・・・という日常にはない観点で話が進み言葉で伝えられるありがたさやコミュニケーションの大切さを実感しました。

笑いあり涙あり、考えさせられることや、思わずそうそう！！と肯いてしまうこともあり、あっという間の時間でした

##### パネルディスカッション

広報活動の大切さと難しさを実感しました。

パネラーの方々は収益を出す側の人としてのアイデアを、また今年優秀賞だった中学の方からは、みんなに読んでもらえる広報紙を作るための工夫を中心に進みました

中でも実践発表は見て読んでもらうためのヒントがたくさんあり、会に参加した方の今後の広報紙作成のヒントがたくさんありました。

#### 第5分科会（地域連携）

「家庭・学校・地域が連携を図り、未来を背負う子どもたちに何ができるのか」をPTAの立場から考えるというのが、第5分科会「地域連携」でした。

午前は、大泉洋さんの父親の大泉恒彦先生の基調講演でした。話が多岐に及び、一つ一つの話が面白く、時折、大泉洋さんに関する話も交えてくれるなど、リラックスして聞くことができました。午後は「子どもが輝く活動拠点を地域と共に目指す」という方針のもとで活動を進めている児童会館の館長さんによる活動報告と札幌市立幌北小学校の「地域連携活動」の2つの実践報告がなされました。その後、パネルディスカッションが行われ、コーディネーターの田山先生のユニークな進行のもと、活動を進める上での課題等について、より具体的な深い話し合いがなされました。

「文化は、その土地をたがやして生まれるものだ。」「子どもたちの“やりたい”をどう実現させていくか」「学校やPTAだけでなく、地域全体の連携が必要」「自分の“ふるさと”だと思える活動や地域の良さを実感出来る活動」など、これからの地域連携を考えていく上で大切なお話をたくさん聞くことができました。また、各学校の活動をまとめた「地域連携活動例ポスター」のすごさが大変印象に残った第5分科会でした。

#### 第6分科会（人権教育）

絆（信頼）・愛（感謝）・夢（希望）をもって生きることの素晴らしさをつないで

今回の第6分科会の基調講演は、ロケット作りで有名な植松電機の植松努氏が講師でした。夢を持ち続けることの大切さ、子どもの夢を壊すのではなく、育てるお手伝いをする大人を目指そうと教えられ、改めて日々の子育てについて考えさせられる講演でした。植松さんがいつも口にする「思うは招く」・・・思うことをやめなければ、夢は必ず叶う。そんな植松さんの強い信念が、自分の夢を叶え、今多くの人たちに夢を持ち続けることの大切さを講演し続ける人を作り上げたのだと感じました。

植松さんが「どうせ、無理」という言葉は人の自信と可能性を奪う最悪の言葉であり、人は自信を失うと他人から物（相手の自信や尊厳までも）を奪うようになる。これに気づけば、暴力や戦争は無くなるのではないかとお話されたことはとても印象的でした。

また、基調講演の後のパネルディスカッションでは、学校・保護者・人権教育の立場からそれぞれのお考えを話されていましたが、やはり人権教育を専門にされている中村衛氏の意見はなるほど・・・と頷けることが多かったです。

「人って素晴らしい。人としてあるべき姿とは？人として失いかけている誇りを呼び戻すには？」という問いには、基調講演をして下さった植松さんが見事に答えて下さった形となりました。

今回の第6分科会は、最初から最後まで飽きる事無く参加させて頂きました。大変有意義な時間を持てたことに感謝しています。

## 第7分科会（国際理解・環境）

自然との共生や体験活動の必要性と、それに伴う大人としての役割や子どもたちの育成に視点をあてた分科会でした。

基調講演では、自然体験活動を通して、人との関わり方を学ぶ社会性の育成について、貴重なお話を聞くことができました。グループでの体験活動を多く取り入れ、話し手と聞き手のプロセスを一緒に作るコミュニケーション力を高めていくことが大切であるということに改めて感じました。お話の中の「相手の気持ちに気付くことが、関係を築くこと」という言葉が、とても心に響きました。そして子どもの社会性を育てるには、まず大人自らが社会体験に積極的にチャレンジし、その姿、その背中を子どもに見せることが重要であると、講演を通して考えさせられました。

研究協議では、緑が減少している札幌の自然環境の現状や、自然を生かした親子のふれあいを通じた実践が発表されました。そしてパネルディスカッションでは、環境問題や国際理解についての討議が進められ、家庭と学校、地域が連携した取組の充実を図っていくことの必要性を強く感じました。

自然環境を守り、自然と共に生きることや、多くの体験活動が、子どもの豊かな感性を育み、子どもの未来に繋がるということに重く受け止めることができた分科会でした。

## 第8分科会（健康安全）

第8分科会では、はじめに基調講演として農事組合法人駒谷農場の駒谷会長より「食から得られるいのち」をテーマに行われました。食べ物を作る生産者の思いと消費者の思い違いを再確認させられる良い内容の基調講演でした。

続いての実践発表では、食育～学校給食について～をテーマに札幌市立東園小学校から学校給食への様々な取組や保護者と子供の意識調査の結果が発表されました。

また「食」を大切に、健やかで豊かな食生活を送ることができる子供を目指してをテーマに札幌市学校給食栄養士会から「児童生徒の健康と食生活に関する調査」の結果を中心にした発表がありました。

人が生きていくうえでの基本の「食」を見つめなおすとともに第8分科会のテーマである健康・安全についての勉強ができた良い分科会でした。

## 特別第1分科会 日本PTA全国協議会担当

日本PTA担当の特別第1分科会は「子の未来（ゆめ）を知り、支援する保護者の力」という研究課題で行われました。

午前中は千堂あきほ氏を講師に、幼少時から1990年代一世を風靡したトレンドィ女優、現在は札幌市在住でタレントとして活動されているお話を聞きました。2児の母でもある千堂氏は子育ても子どもの意思を尊重し、積極的に行っている姿勢は大変参考になるものでした。

午後は札幌市在住の中学生5名による意見発表が行われ、各々が冷静に現状を把握し、熱く将来の夢を語っていたのは好感が持てました。その中で記憶に残ったのは、「悩み事を親に相談しますか？」との質問に、「親よりも友人、先生」という答えが多かったことです。その理由は、はずかしい、世代が違う、介入してほしくないなどの意見があり、特に親に迷惑をかけたくないという答えはショックでした。一番迷惑をかけて良いのが親なのに……。このままでは子の未来（ゆめ）のために親力が発揮できないのではと考えさせられました。

最後に日本PTA役員、中学生を持つ母親、北海道大学准教授による討議が行われ、子どもが成長、発達し思考が深まるにつれ複雑で困難な問題が起き、それに親はどう対応するのかなどの話がありました。結果よりも経過を大事にする。失敗してもまた次にという意欲を出させることが親の役目だろうと感じました。

子どもの未来（ゆめ）の実現のためには、まず我々親がまだまだ学ぶ必要があることに気付かされた分科会となりました。

## 特別第2分科会 文部科学省協力

「スマホ・ケータイの問題は、『心』の問題。」竹内先生が話されたこの言葉が強く印象に残りました。私たち大人は今まさに「子どもたちの心」に真摯に向き合い、見つめ、関わらなければならないということ。子どもたちの心の問題と向き合うことが課題解決のベース

に常になければ、子どもたちをとりまくスマホやケータイの問題は根本的な解決策へつながらない、ということ強く認識させられた分科会でした。

子どもたちをとりまく現状で驚かされたのは、子どもと大人のスマホやネットに対する知識や捉え方・感覚の差がいかにかに大きいか、という事です。スマホ・ケータイ所持率の低年齢化や、ケータイネイティブ2世(生まれた時からケータイやスマホのある世代)のいる時代。寂しく相談相手のいない子たちが、すぐに返事が返ってくるスマホやケータイで相手を求め、寂しさを埋めようとするのは必定。今被害に遭っているのは、そうした寂しい子たちであることを知らされ、大きな衝撃を受けました。そんな被害から子どもたちを守るためにも、家庭で「スマホ(のルール)について親子で話す」こと、「いつでも相談に乗るよ」「(スマホのことはよくわからないから)詳しく知っている人を知っているよ」の声かけで、「あなたが大事!守りたい!」というメッセージを子どもたちに発信することが大事、とのアドバイスが希望の灯りをともしてくれました。「子どもたちと大人で共に使い方やルールを考え作っていく」文化を、力を合わせて創っていかれたらと思います。

全体会の前に開催された道ブロック大会では、札幌大会川端実行委員長から勝部十勝・帯広大会実行委員長へ大会旗が引き継がれました。続いて、勝部実行委員長・保前大会本部長とゆるキャラも登場したPR隊による心のこもった十勝・帯広大会のPRがありました。



全体会は、平岸天神ジュニア、続いて平岸天神の躍動感溢れるYOSAKOIソーラン踊りで始まりました。日P会長の「子どもたちの将来に責任の持てる社会を創るため、今だから出来るPTAを、ひとりの百歩より100人の一歩から着実に継続していきましょう。」という挨拶、次回開催地徳島の紹介、大会宣言など力強く進行しました。

記念講演は、脚本家の倉本聰氏による「あなたは子どもたちの想像力を育てていますか」と題した、ご自身の体験を基にしたお話でした。富良野自然塾で生活する若者達の時代による変化、「五合目から登山をしても本当に登ったことにはならない・・・」などわかりやすく話していただきました。現在の日常の生活と想像力について、改めて考えさせられる貴重な時間となりました。

閉会后、会場を去る皆さんに徳島大会PR隊の見送りがありました。さらに道内の皆さんには十勝管内PTA連合会と帯広市PTA連合会の皆さんからの「来年は帯広で待っています。是非、来てください。」と声かけがあり、札幌大会は終了しました。

